

〔翻刻・抄録〕貴司山治『蒙古日記』（一九四三年）

翻刻 村田裕和・澤辺真人
補注 伊藤 純

（凡例）

- ・貴司山治の『蒙古日記』全五冊（昭和十八年九月十五日～十一月二十四日）を翻刻・抄録した。翻刻には『貴司山治全日記DVD版』（不二出版）を用いた。記述範囲は次の通り。

『蒙古日記』第一冊（昭和十八年九月十五日～十月六日）

『蒙古日記』第二冊（昭和十八年十月七日～十月十五日）

『蒙古日記』第三冊（昭和十八年十月十五日～十月二十五日）

『蒙古日記』第四冊（昭和十八年十月二十五日～十一月十一日）

『蒙古日記』第五冊（昭和十八年十一月十二日～十一月二十四日）

- ・抄録にあたっては、貴司山治の心情、交流した日本人の姿、当時の内蒙古の様子を特徴的に示す箇所を選んだ。

- ・本文中で省略した個所は「中略」で示す。本文中の「＊」は補注者による注記。改行段下げし＊を付した段落も同じ。

- ・ゴシック体の見出しは原文を参照しつつ新たに付した（原文のまま用いた場合もある）。

- ・旧字体は新字体に改め、各段落の冒頭に一字下げを施した。促音・

- ・拗音は小書きかどうか判別しがたいものもあったが、筆記された時代を考慮し大書き（直音）に統一した。
- ・記述の一部に今日の見地からすれば不適切な表現があるが、当時の時代背景等を考慮し、原文のまま収録した。

（目次）

九月十五日	水曜日（東京駅）……………	131
下駄履き、着流しでの出発		
九月十六日	木曜日（下関）……………	132
M画伯の出会い		
九月十八日	土曜日（北京）……………	133
日本軍の検問		
九月二十五日	土曜日（張家口）……………	134
臭気漂う蒙古政庁舎		
十月十二日	火曜日（貝子廟）……………	135
アパカ特務機関長・牧野中佐		

十月十四日	木曜日	(西ウジムチン)……………	135
出迎えた日本人	／赤い座蒲団	／狂乱の晩餐	
十月十五日	金曜日	(西ウジムチン)……………	139
M画伯との別れ			
十月十六日	土曜日	(西ウジムチン)……………	140
ホリシヤの実際	／蒙古草原を荒らす者		
十月十七日	日曜日	(西ウジムチン)……………	142
タラカン・バクシの仕事ぶり	／西ウジムチン小学校		
十月十九日	火曜日	(西ウジムチン)……………	144
曠野の魔王	／プランパゴ——小熊秀雄の追憶	／一つの人生	
十一月二十日	土曜日	(新京)……………	149
山田清三郎と再会			
十一月二十四日	水曜日	(朝鮮海峡)……………	150
知識層移民団を——	朝日新聞満洲総局長との船中談		
補注	……………		151
『蒙古日記』旅程一覽	……………		133
満洲・内蒙古関係図	……………		156

九月十五日 水曜日 (東京駅)

下駄履き、着流しでの出発

この二、三日丁度七月下旬にみるやうな湿った暑苦しいやな日和がつづいてゐる。私の一番いやなそして一番怖れてゐる季節が蒙古にでかける矢先きの九月の半ばになつてから再来したのだ。

暑氣と湿氣が膚にじめじめして、口をきくのも憂鬱になつてしまふ。不機嫌な氣持の中では旅行の仕度など何もできることでない。冬の外套や洋服を詰めこんだトランクを一つきのふ下関まで手荷物にして送つただけ。

けふ一時五分の臨時特急に乗るため、朝十時に家をでかける。きのふまで着てゐた紺の単衣を着たまま、下駄をはいて洋傘一本、折靴だけ提げて行く。(中略)

電車で東京駅に行く。東京駅のプラットフォームではますます蒸し暑い。とてもいやな感じの日だ。東京のこのたまらない空氣の中から早く逃げだして行きたい——まるでそれが蒙古へ行く目的のやうに感じられてくる。予定どほり東京発、孤独の、たつたひとりの出発。(中略)しかし今度の旅行はちつとも自分の骨休めではない。仇敵のごとき今から先きの生活の中で、死ぬまでにしとげるつもり自分の芸術の仕事が何であるかを、私は十分に弁へてゐる。そして東京の最近二、三年の間の自分の書齋の仕事の限度がみえてきたのを、ましがひなく知つてゐる。

この一年あまり次第にのしかかつてくる隘路——自分のやつてゐ

る芸術の仕事と現実のあいだに生ずる隘路を、いかに突破するかを、私はかてて加へて自分の小さな個人生活の一々の悩みにまで結びつけて突きとめようとした。そしてさうしたつもりだ。

旅ではさうした今までのケチな仕事の疲労も捨ててこよう。しかし更にその一段階上の、まだ日本の作家がだれも切り拓いてゐない世界——芸術上の仕事のプランを獲得してこないかぎり、私はかへつてこないつもりだ。

どこまでもどこまでも、日本人の一人もめなくなる最前方までで行くつもりだ。自分の行く場所が蒙古であつても支那の奥地であつても、どこであつてもそれは問ふところではない。

十三、四歳のころ、すでに自分は人間としてほかの何者にもならず小説作家になつて死んでやらうと一人で決心した。その時からいへばもう三十年たつてゐる。四十五歳の自分が、日本人として未曾有の時代に生き、善くも悪くもこの民族の運命を作家としての自身自身で、日本人の芸術の分野で、必ず解決してみせると信じてゐる。そのために今度のやうな旅行をひそかに企てたとしても私にとつては別段をかしいことでも大それたことでも何でもないわけだ。——汽車の中でそこまで考へる。はじめにそれだけ自分の考へを確めておけばたくさんだらうと思つて、あとはそのまま寝台にはいつて寝てしまふ。

車輪の軋りの中で一、二度眼がさめる。その時狭苦しい寝台にひそんで眠つてゐる自分を盗賊のやうに感じた。

(十九日北京において記す)

九月十六日 木曜日 (下関)

M画伯の出迎え

下関に着く。東京と同じやうに暑苦しく、いよいよもつてたまらない感じだ。

汽車から降りたところで一日先きにきてゐるMに^①ばつたり会ふ。かれは棧橋詰め^②の山口県特高課員の島村といふ男をつれて私をプラツトまで迎へにきたのだ。

島村といふのは三十あまりのおとなしさうな人物である。この「特高」の案内で棧橋上の食堂へ行つて朝飯を食ふ。そしてやはり島村に普通の乗客よりも先きに連絡船に乗せてもらふ。

島村は自分たちのために釜山から向ふの寝台券だの北京までの切符だの、けふの船に乗る指定を受けてゐない自分たちを船の事務長に頼む世話だの、いろいろ奔走してくれる。

船の中でそのほか所持金の処理をする。支那や蒙古へは二百円しか持つて行けないことになつてゐるので、自分で二百円持ち、Mにも二百円持たせ、なほ残つた二百円は島村に預ける。

*この後、朝鮮海峡を渡り釜山に入港。すぐ北京行きの急行「興亜」に乗車し、朝鮮半島を丸二日ばかりで縦断して北京に到着する。

『蒙古日記』 旅程一覧（▼は今回抄録した項目）

9・15 ↓9・18	▼東京↓下関↓朝鮮海峡↓釜山↓北京
9・18 ↓9・22	北京滞在 *坂井徳三、黄子明、福田千之と会う。
9・22 ↓9・24	北京↓大同↓張家口（雲岡石窟見学）
9・25 ↓10・12	▼張家口滞在 *この間に張北、宣化（龍烟鉄鉱）、厚和、包頭に行く。蒙古自治邦、駐蒙軍の要人と会う。
10・12 ↓10・14	▼貝子廟滞在 *アバカ特務機関長牧野中佐、蒙古浪人猪口三蔵、西ウジムチン駐在員左近允正也と会う。
10・14 ↓10・21	▼西ウジムチン滞在 *蒙古浪人の笹目雄恒、元血盟団員森憲二と会う。 *ホリシヤ、漢人商人、小学校などを取材。 *元東ウジムチン王ドルジを訪問。
10・21 ↓10・26	貝子廟滞在 *青山守次医師を取材。手芸学校・中学校を取材。
10・26 ↓10・30	張家口滞在 張家口↓大同↓太原↓北京 *太原で山西省顧問甲斐政治と会う。
10・31 ↓11・3	北京滞在
11・3 ↓11・14	北京↓奉天↓ハルビン（*福田千之との旅行）
11・16 ↓11・19	ハルビン滞在
11・20 ↓11・22	▼新京滞在 *山田清三郎と会う。
11・22 ↓11・29	新京↓釜山↓朝鮮海峡↓下関↓東京

九月十八日 土曜日（北京）

日本軍の検閲

北京着同じく十一時半（*午後）。プラツトに降りると夜風が恐しく寒くて、単衣の着ながしで下駄をはいてここまで来た私にはちよつとたへられないくらい。寒さのために全く歯の根も合はず、がくがくになるので、体中に力を入れなければプラツトが歩けないのがをかしくなる。（中略）

まもなく停車場司令部からかへつてきたMと一しよにめいめい洋車に乗つて南河沿の旅館翠明荘へ行く。

途中の電車通りで鉄砲に着剣した兵隊に誰何されて車から引きおろされる。中国兵だと思つたMが「君は何だ？」と喰つてかかると、若い兵隊は少したじろいで、Mの小さな体をためつすかしつのぞきこむ。その時はたからよくみると、日本の歩兵上等兵の肩章がついてゐる。日本の兵隊なのだ。Mの方でも同時にわかつたとみえて、「いやあなた方ですか。一体どうしたのです？」と頓狂なお世辞の声をだす。

かれは自分が厚和の特務機関員なので、いつも虎の子のやうにポケットに入れてゐてすぐに振りまはしたがる写真付きの身分証明書をここぞとばかりに取りだして、兵隊に向ひやら説明する。

私にはさうしたかれの態度がいかにもインチキにみえるのだが、日本の兵隊はとたんに態度が變つてMに対して鄭重になり、かれの鞆をあげさせて、

「やあ林檎がはいつてゐるな。食べ物を持つてはいるのはいけな
いんですが、しかし見逃しておきませうか。」

といつてゐるのがきこえる。兵隊たちはコレラの予防のために、
汽車から降りてくる通行人の荷物を調べて、食品を携帯してゐるか
ゐないかを調べてゐるのだ。

私の方へも別の兵隊がやつてきたが、

「食べ物は何も持つてゐません。」

と答へると、荷物はあけなかつた。

暗がりの電車道では一人一人の兵隊に自動車も洋車もみな止めら
れてゐる。ちよつとみると何事やらんといふものものしい光景だ。

自分の洋車に乗つてここをはなれる時、私は北京を掌握してゐる
日本軍の武力をかいまみたやうな気がした。

暗い広い道をいくつか走つて旅館翠明荘に着く。ここに泊る。

*北京には九月十八日から二十二日まで滞在し、松下銜次郎⁽²⁾、福

田千之⁽³⁾、黄子明⁽⁴⁾、坂井徳三⁽⁵⁾らと会つてゐる。次いで二十二日、

二十四日、山西省大同に行き修道院や雲崗石仏を見学し、二十四
日夜に張家口に入つた。

九月二十五日 土曜日 (張家口)

臭気漂う蒙古政庁舎

張家口第一日。

張家口は北京から蒙疆へはいつてくる時の入口で、はじめにここ
へくるはずなのを、私は最初に大同へ行つてしまつたのである。

はじめて「蒙古自治邦⁽⁷⁾」の暫定首都といふ張家口の町をみる。車
に乗つて宿をいで、蒙古政府の政庁——といつても、二階もない煉
瓦建ての汚れた建物で、廊下を通ると、恐しく小便の臭ひがする
——。その政庁に赴いて弘報局だの、総務局だのと札のかかつた部
屋部屋をたづねていろいろな役人に会ふ。

この政庁の廊下が恐しく臭いのは、建物の一番恰好の場所に便所
が設けられてあつて、その掃除が行きとどかないため臭気が建物
の中にいつのまにかすつかり行き渡つてしまひ、蒙古政府は丁度大
きな小便の桶のやうな建物となつてゐるのだ。

*九月二十五日から十月十二日の間は張家口に滞在。ここを拠点に

陸軍病院慰問講演、張北駐屯部隊慰問講演、華北交通鉄路局時局
講演などをこなし、宣化の龍烟鉄鉞見学、大同の日本人への時局
講演、厚和(綏遠⁽⁸⁾フフホト)、包頭など内蒙の主要都市をめぐつ
てゐる。また、李守信將軍、岩崎駐蒙公司、蒙古自治邦興蒙委員

会顧問の岡部理⁽¹⁰⁾、蒙古軍最高顧問小倉達次少將、イスラム学のオ
ーソリティで当時は厚和の日本領事館の高官だつた須田正繼⁽¹¹⁾、自
治邦回教委員長蔣輝若⁽¹²⁾など要路の人々と会見、取材してゐる。

*そして十二日、張家口を發ち飛行機で当初の目的地だつた蒙古草
原の貝子廟におもむく。

十月十二日 火曜日 (貝子廟)

アパカ特務機関長・牧野中佐

貝子廟^⑪——ここはもうシリンゴールの奥地だ。外蒙との国境もすぐ近くにある。ずいぶん遠くまできたものだ。飛行機のそばに立つて西北方を見ると、ラマ寺の建物のむらがつてゐるのがみえる。多分そこが貝子廟だらう。それを背景にして白い塀にかこまれた一廓に無電の柱が立つてゐる。(あとでそこが特務機関の牧野隊だとわかつた。)

その方向と反対の方には、やはり土塀に囲まれたシリンゴール盟公署の一廓がすぐ前にみえてゐた。盟公署の塀外には洋風の二、三の大きな建物がみえた。それが保健所、中学校、技術養成所などとやはりあとでわかつた。〔中略〕

機関長牧野中佐に面会。牧野正民といふ機関長は騎兵中佐で、これもあとでわかつたのだが、常陸の笠間の藩主牧野家の当主か支族かである。当主だらうと思ふが、何度きいてもどうしても答へなかつた。痩せた蒼白い人で、たえず冷たい眼つきをうかべて、部下たちに対して朝から晩まで骨を刺すやうな皮肉をあげせるのがこの人の癖のやうだ。部下たちはみんな縮みあがつて、なるべく機関長の面前に出るのを避けてゐる。

私が挨拶した時にも、牧野中佐は眼鏡の底から冷たい、いくらか意地悪な目の色をうかべて、「こんな奥地まできて、わしのやうな手ごはい軍人に会つてはたまらんだらう。」といった。

「いや、鉄道沿線歩いてゐる間、たくさんな軍人諸公にお目にかかりましたが、みんな歓待してくれすぎて私には歯ごたへがなく、かへつてたよりない気がしたのですが、あなたに会つて、何だか気がしやんとして、体のだるいのが少し癒つたやうです。」

と、私が答へると、とたんに相手の中佐は眼鏡の中のその冷たい眼に思ひがけない微笑をただよはせた。〔中略〕

「ぢやあ、ゆつくり滞在していraftしやい。疲れがなほるやうに草原のご馳走をさしあげませう。」

と用語まで改まつた。非常に神経質な、そして敏感すぎる人なのだ。事実私の今まで会つたどの軍人よりも牧野中佐は頭脳の明敏な、談理の上でどこまでどんな話を仕向けていいか、その振幅をあらかじめこちらで期待できるやうな知識人なのである。

*翌日(十月十三日)午後、牧野隊長、猪口三蔵、^⑫盟公署池田事務官、西ウジムチン駐在左近允正也^⑬らとの座談会が行われた。内蒙古の社会・経済、ラマ僧対策などについて情報を入手し、膨大な記録を取っている。ここで出会つた左近允正也に誘われ、翌十四日、西ウジムチンを訪問する。

十月十四日 木曜日 (西ウジムチン)

出迎えた日本人

「さあ、みんなおりて下さい。」

左近允君は先きにおり立つて大声をあげた。私も車からおりて腰をのびしたが、M君はいかにも疲れたやうな顔で、長い蒙古服を引きずりながらトラックの上からおりてきた。

車のとまつてゐるのは寺の門前の向つて左角であつた。蒙古人たちが左近允君を迎へて一人一人すすみでると、片脚を地に折つて挨拶をした。左近允君はそれに対していちいちうなづきながら鷹揚に会釈するのだが、なるほどここではかれは王者のやうである。さつき話したかれの言葉がすべてここでは法律である——といふのも、嘘でない気がした。

寺の門から、今まで午睡でもしてゐたやうな蒼白い元氣のない顔をした日本人（*森憲⁽¹⁸⁾）が一人、兵隊服の上衣をぬいで、靴下を下駄をつつかけ、両手をバンドの間にさしこみながら近づいてきた。無精髭をはやした頬にさびしさうな笑皺をたたへて、「おかへりなさい。」と左近允君にいった。「中略」

門をはいつたすぐ左の隅に左近允君の宿舎があつた。中にはいるとたつた一と間だが、立派な蒙古絨氈を敷き、その上にまつ赤なふちとりをした西藏絨氈のラマ寺にしかない座蒲団を敷きつめてある。屋根の低い土の家の中にそれだけの敷物がぎつしり敷きつめてあるのが、もう何だかアラビヤナイトのどこかのページへまぎれこんだやうな感じである。「中略」

左近允君は私が森君と話してゐる間に背広を蒙古服に着替へてかれ自身の使用人らしい三、四人の蒙古少年たちを私にはわからない蒙古語で威猛高に叱りとばしながら、部屋の中をでたりはいつたり

した。私のためだといつて大へんなご馳走をしてゐるのださうである。相手役にのこつてゐる森君なる人の素性がはじめて私にわかつてきた。森憲二君は京都帝大経済学部とか法学部とかにゐる間に血盟団運動を計画した人である。かれ自身若槻某（*礼次郎）を暗殺することを引きうけてゐた廉で懲役十五年になり、何年かを牢屋で暮して、その後恩赦を受け、娑婆にでくると、蒙古にはいり、特務機関員として包頭に駐在中独断で何人かの革新的な仲間とともに西北工作を企てた。森君たちのしたことは寧夏甘肅の馬一族の勢力を日本側につけようといふので、馬將軍に連絡をとつたといふことである。私はまだよく知らないが、その他に当時包頭の特務機関員たちが五原策戦なるものを画策したらしい。それらが一括して参謀本部の忌諱にふれ、みんなくびになつた。森君は内地にかへつて靖臣寮といふ塾をひらき、西北に皇道を布くための挺身隊たるべき有為の青年を教育する仕事に没頭した。そこへ一兵卒として召集され、関東軍に入営した。入営後森君の素性がわかつてゐるので特務機関にまはされ、今は王爺廟の特務機関に属し、たつた二等兵だが機関長金澤大佐から十数人の蒙古語練習生を委託されて、それを引率してこの地へ派遣されてきてゐるのである。

*十月十九日の記事には、森が「死におくれた」と溜息をつく姿が記されている。「早い時代の国家運動に従事した所謂右翼運動者の知識分子が大東亜戦争の展開してゐる今のやうな時代にはいつて、案外にもすつかり個人的に頹廢して、たやすくは救ひがたい深淵に陥つ

てゐる姿を森君に発見した」とある。

赤い座蒲団

*貴司のために赤い屋根の包が用意される。コバルト色の蒙古服を着た左近允は、「赤い色の包は貴族の包」だと説明し、「王様になつたつもりで」過言すようにと言う。

「ちやあ、この赤い座蒲団なども貴族用ですか？」

と私は自分も尻の下に敷いてをり、そして西藏風とでもいふやうなこの狭い壁の中の部屋に敷きつめてある何枚もの座蒲団のことをきいた。〔中略〕

「さうです。草原では衣食住に関して、何でも赤い色のものは貴族用と思へばまちがひありません。〔後略〕」

「そんな大した座蒲団を、どうしてかう敷きつばなしにしておくのです？」

と、私がいふと、左近允君は得意になつて答へる。

「ここへは西ウヂムチン中の蒙古人たちがあらゆる訴へ事を持つてやつてくるのです。私はかれらの最高審判官です。それがきてみると、かういふ狭いところにあるのでは向ふで權威を感じません。しかしかれらが門口で馬を乗りすてて私のこの宿舎にはいつてきた時、入口に立つて、かうして赤い座蒲団が部屋中に敷きつめてあるのをみたら、たとへ王様でも容易に中へふみこめないのです。ましてそれ以下の役人や平民たちは絶対にこの部屋にあがることをなし

えません。そこで私は傲然とこの部屋の中から、赤い座蒲団の上に胡坐をかいて、『その方たち願ひの趣きは何事ぢや？』といふやうな具合にどなるのですが、実際の訴訟事は向ふの調べ室みたいな別の部屋で片づけれます。その前にここへかれらを引見して威服せしめるのに、この座蒲団をしまひこんでおいはいけないのです。これでなかなかどうしまして、いろんな苦心があるんですよ。」

「ふうん、するとあなたの權威は座蒲団によつて保たれてゐるわけですか？」

「いや、座蒲団によつて引き立つてゐるんです。座蒲団がなくても私を輕蔑する者は今では一人もゐません。」

かたはらにきいてゐた森君が、弱々しく笑つて、いつた。

「輕蔑どころか、みんな怖れてゐますよ。タラカン・バクシといへば泣く子も黙るといふくらゐですからね。」

「タラカン・バクシつて何です？」

「私の綽名ですよ。」

と、左近允君は平然とうなづいた。タラカンといふのは蒙古語で巨大の意味ださうである。バクシは先生とか大人とかの意味で、今の蒙古人は日本人をみさへすれば支那人が「先生」とか「大人」とかいふやうに、バクシ、バクシとよぶ。もとはバクシは大切な言葉であつたのを、今では日本人のために蒙古人はバクシをすつかり濫用してしまつてゐる。それにしても私は、コバルト色の蒙古服を着て大きな赧らんだ顔をした左近允君を、なるほど「タラカン・バクシ」だと思つた。

狂乱の晩餐

をりから左近允君の使つてゐる蒙古少年たちが入口にあらはれて、晩の食事のできたことを知らせた。左近允君の幕下には十一、二の少年が三人と、二十くらゐの青年が一人使はれてゐるやうであつたが、三少年はみな栗鼠のやうに敏活であつた。一青年の方は魯鈍な表情をしてゐたが恐しく眞面目で、のっそりと入口にあらはれると、ていねいなお辞儀をして両手を前にそろへてたれながら、小腰をかがめて左近允君に口をきいた。私はその青年が左近允君を、絶対的な君主として崇めてゐるのをみて、左近允君がそれほどの権力を持つてゐる男だといふよりも、蒙古人自身がこゝではなるほどまことに旧い封建的な性格をちゃんと保つてゐるのを、さつきからつくづくみてゐた。

その青年が先きに立つて羊の肉の料理を盛つたいくつもの井をはこんできた。青年のあとにつづいて三人の少年がそれぞれ一つづつの井をはこんできた。おいしさうな羊の肉の料理が湯気を立ててゐる。背の低い食卓にそれらの井がならぶ。茶碗を持ちだし、割箸をそろへ、焚けたばかりの白米の飯が湯気を立ててゐるお櫃を少年の一人が抱へてくる。左近允君はしばらくの間はそれらのこまかいいちいちのことを、喚きちらすやうな大声で指図するのである。左近允君の顔はすっかり紅潮して、額や首筋から汗がにじんでゐた。眼は血走つて少年たちに対し、ほとんど怒り狂つてゐるやうにみえた。割箸の数が足りないといつては何かその辺にあるものを一人の少年

に投げつけた。茶碗の中に埃がついてゐたのをみつけた時には、左近允君は爆発するやうな大声でどなつて、その茶碗を持ったまま部屋からとびだして行つた。少年たちは部屋の片隅に逃げて、頭をかかへながら泣いた。

座にもどつてきた左近允君は、再び大声で逃げちつた家僕たちをよんだ。家僕頭らしい青年が恐るおそるはいつてきて、洗ひなほした茶碗を食卓のはしにおいた。左近允君は自分で、みんなのためにいちいちの茶碗に飯をついだ。二人の少年が味噌汁のはいつた大きな鍋を台のやうなものにのせてはこんできた。青年が鍋の蓋をとつて味噌汁をついだ。

左近允君は味噌汁を椀から一口飲んでみて、たちまちそれをおくくと、青年に向つて眼を怒らせて喚き立てた。一番大きな井に盛つてある羊の肉の料理の中から骨のついた肉のひと切れを手にとると、青年の頭を目がけて投げつけた。青年はいつもさうされてゐるらしく、左近允君が羊の骨に手をかけた時にもう自分の頭をかかへて首をすくめてゐた。骨は青年の肘にあつた。青年はお辞儀をしながらしづかにでて行つた。

私だけでなく、みんな暗澹となつて食事をするのも手びかえてゐた。一とほり狂乱がおさまつたらしく、左近允君は気の抜けたやうな顔になつて、

「さあみなさん、飯を食つて下さい。」

私は妙な気持ちで食事を頂戴した。あとになると飯も羊の肉もずゐぶんうまかつたが、この最初の晩餐では左近允君の狂態にびつく

りして、味も何もわからなかった。

そしてこの日からここに住むやうになつて、私にはこの左近允正也といふ青年が、どんな意味で蒙古人たちから「タラカン・バクシ」とよばれてゐるかがだんだんわかつてきた。少くともタラカン・バクシは、食事の時間になると必ず顔色をかへ気が狂つたやうにどなりだす——だけでなく、家僕たちを追ひかけたり、ものを投げつけたり、時には大きな海軍ナイフを逆手に持つて、十一、二の子供が悲鳴をあげて逃げ走るのを、ほんたうに傷つけるつもりか威すつもりか、結果をかまはず投げつけた——さうした暴君であることも含まれてゐるのだとわかつた。

ともかくこの最初の晩の怖るべき晩餐は終つた。一座にはけふトラツクに一しよに乗つてきたM君や田中運転手のほかに、ササメ・バクシといふのがゐた。ササメバクシは齡のころ五十あまり、つんつるの丸坊主がぴかぴか光つて顔は女の子のやうに淡紅色である。ここへ着くまで私はけふのトラツクにかういふ人が乗つてゐるとは知らなかつたが、食事の前に名乗りあつて相手のさしだした名刺をみると、満洲国王爺廟に牧場を経営してゐるかたはら特務機関の囑託をも勤めてゐるといふ笹目雄恒氏である。「中略」森君の私に教へるところによると、ササメ・バクシは菊竹実蔵、佐藤富江、盛島角房とともに蒙古開拓の四天王ともいふべき経歴の人だとのこと。そのササメ・バクシでさへタラカン・バクシが荒れてゐる最中には鼻白んだ顔で、隅に鳴りをしづめてゐた。

十月十五日 金曜日 (西ウジムチン)

M画伯との別れ

*十月十五日、西ウジムチンの王府で少年の西ウジムチン王、七歳の活仏に⁽²⁰⁾拝謁、チベット医学の薬堂の見学などをする。一方、先達のもりで同行したMが、行く先々で素性を怪しまれ現地の関係者から排斥され、また、金についても極めてルーズなことが次第に露見してくる。問い質すと、Mの特務機関囑託の身分証は期限切れで、預けた金は「六十円」しか残っていない。ついに貴司は「先におかへりなさい」と宣告する。

蒙古にきて以来、私のつれてゐるM君はずゐぶん煩はしい同伴者であつたはずだが、そして事実私も腹にすゑかねたり、いやだと思つたり、いろいろしてゐながら、その実妙に苦にならない相手であつた。あるひはこれは私のだらしない性情かも知れなかつたが、今も相当冷酷にいろんなことをいつたあとだのに、かへつて私自身は機嫌がなほつたやうな清々した気持ちである。私にひどく侮辱されたはずのM君自身が一向にひがみもくじけもせず、けろりとしたやうにそばに寝てゐる——「中略」

私は自分がいま身を横たへて寝てゐるかういふ場所まで旅行してきたことに一種の孤獨な楽しさを感じた。その楽しさの中には作家的な感情も溢れてゐた。自分の気持ちをだれかにわかちたい考へが次第に胸の中に溜つてきた。作家仲間のだれにも語るべき友としては

ない。いつのまにか私は長い作家生活の間で、友といふものを失つてしまつたらしい。それをさびしいとちつとも思はないのは自分自身にかうした場合の懷びを述べる表現の仕事がのこされてゐるからだ。

十月十六日 土曜日 (西ウジムチン)

ホリシヤの實際

昨夜おそくまで眠れなかつたため、眼を覺ましてみると十時であつた。M君の姿は包の中になかつた。やつとこさ起きて外にでてみると、空は曇つてゐた。風が寒く、少しばかりの水が地に凍つてゐる。左近允君の宿舍の入口まで行くと、そこにかけてある寒暖計は零下二度であつた。少年に湯をくませて顔を洗つた。(中略)

*この後、左近允、笹目とともに馬で王府から一里ほど離れた西ウジムチン旗ホリシヤ(協同組合)を訪問する。

私に嗅ぎ煙草入れをさしだした蒙古人は三、四人あつたが、最後の一人はかうした辞儀のすんだのちに、ふところから名刺をだして私によこした。名刺には「烏珠穆沁(*ウジムチン)右旗生活豪立希亜理事ウルチョングー」と書いてあつた。豪立希亜といふのがホリシヤのことである。

*ウルチョングーとの一問一答(要約) 従業員は三十六人、ほとんど蒙古人、漢人も若干。皆年中多忙とのこと。成吉思汗紀元七三五(西曆一九四〇)年十月創立、資本金五万円、後二一万円に増額、蒙古銀行借入一九万円。年商一〇五万円、利益一五万円、利益金処分は配当が出資金一〇円に対して四円。西ウジムチン三三〇六戸全戸が出資、貧困者には旗が立替(六〇四戸)。必需物資はシーブ(支那木綿)、買入は羊毛、買上羊毛は全部日本軍に納入。その代償に軍はシーブを渡す。牛一二〇頭、馬七七〇頭買上、満洲に売つてパイメン、砂糖、粟、黍を得る。一割がけ程度で旗民に売る。配給順序。1軍人遺族、2貧困者、3中流階級、4上流階級、5官吏、6王様。一面に絨氈工場がある。

左近允君は不機嫌さうな表情で、ホリシヤがその実、未だとかく上流階級や役人や王様の私益行為の対象となりやすく、十分その機能を發揮してゐないこと、ホリシヤに本来の機能を發揮させるためには王公制度から先きに改革しなければなるまいといふこと、それに反して一概に漢人売買を悪くはいへないといふこと、——などを語りながら、私をホリシヤのすぐ隣りの敷地に店を張つてゐる漢人売買へ案内するのである。

蒙古草原を荒らす者

私は又おつかなびつくりで馬に乗つて、漢人売買の建物の方までまはつて行つた。馬上でふりかへりながら、左近允君が話の続きを

した。

「第一なぜ漢人売買を悪くいへないかといひますと、ホリシヤで仕入れる品物よりも、漢人が蒙古人に売る品物の方が、同じ品物でありながら値が安いのです。そして漢人が蒙古人から買ひあげる品物の値段は、やはりすぐそばに店を張つてゐる大蒙会社が軍の權威を笠にきて蒙古人から買ひあげる値段よりも高いのです。漢人は蒙古人を搾る搾ると一口にいふが、私のみたところでは、「中略」おそらくその搾り方は王公階級や大蒙会社が蒙古人を搾るのに較べずつと害悪の少ないものなのです。」

左近允君は大蒙公司——この奥地に出張つてきてゐる日本人商人を非常に嫌つてゐた。

「僕はとてもあいつらが嫌ひですね。軍の御用商人だとはいつてももともとかれらは営利業者なのです。だから軍を笠にきて強権に物をいはせるから、強権も何も持つてゐない漢人よりは押しがきいて、蒙古人からは法外に安い値段で牛でも馬でもふんだくるんです。それでは蒙古の復興も何もありはしません。僕らが、蒙古人を擁護する立場からいへば大蒙公司などのやり口はまことに困るので、いろいろいひますと、かれらは軍へ私などのことを巧みに中傷するのです。その悪辣さは近づきたいものがあります。」

すると、かたはらを馬でついてくる笹目氏が赤い顔をして口調をあはせた。

「満洲では蒙古人から牛や馬を買ひあげるのは満洲畜産会社なのですが、われわれ蒙古関係者は、だれもそれを満洲畜産会社とは呼

びません。満洲畜生会社と呼びます。それくらゐかれらは非道なことを蒙古人に対して行ひつづけてゐるのです。みやうによれば、一番この蒙古草原を荒してゐるのは、その畜生どもでせう。そして同じ資本がこの自治邦にはいつてきて蒙疆畜産と名乗つてゐるのです。」

「大蒙公司は又別なのですか？」と、私はきいた。

「大蒙公司はやはり軍御用ですが、主として羊毛羊皮を買つて軍に納めてゐるのです。まあ先生は今ホリシヤをみたのですから、漢人売買をみてごらんさい。そしてあとで大蒙公司によつてごらんさい。どこが一番先生にとつて感じがいいか。僕などがあまり先入観をあたへない方がいいかも知れません。」

私たちは馬をおりた。漢人売買はアンペラで屋根を張つた粗末な掘建小屋であつた。

*どこまでも腰の低い漢人売買の番頭「馬生福（63歳）」からの聞き取り（要約） 蒙地貿易の商人は山西省付近に結集しており本店がある。社員は三年蒙地にはいり六ヶ月故郷で暮らす。妻帯者でもほとんど單身でいく。今ここには二十八人が駐在している。商品の補給は牛車で数ヶ月がかりで輸送する。二隊が動いている。バター、米、粟、菓子、パイメン、はるさめなどを持ち込み、牛、馬、羊、羊毛、金などを買い取る。それらは貝子廟と張家口で売りさばく。

*左近允の補足説明（要約） 牛車は移動商隊となつて包から包へ行商する。蒙古人の欲しがる商品を包の前で見せびらかし機嫌を

取り愛想よく売りつけ、産物を買収する。蒙古人の懐に深く食い込んでいる。日本商社の大蒙公司だの蒙疆畜産だのといつても、かれらはここに事務所を構えてふんぞりかえっているだけだ。日本商社は漢人売買を手先に使うブローカーに過ぎない。大蒙公司は大倉財閥系の会社である。

十月十七日 日曜日（西ウジムチン）

タラカン・バクシの仕事ぶり

けふは一日中空が曇つて、日中でも寒暖計は零度から昇らない。包をでて左近允君の宿舎に行き、人々と雑談しながら時をすごす。ここへきてみると西ウジムチンにおけるタラカンバクシの役割りや位置がわかつてきた。朝早くから——といつても蒙古草原の朝早くは午前九時か十時ごろである——タラカンバクシは蒙古服に着替へ、蒙古刀を吊し、蒙古帽をかぶつて宿舎をでて行く。それは丁度私の包に隣の一廊に建つ粗末な倉庫——それは倉庫ではなくて、タラカンバクシの警察であり、法廷であり、役場であつた。その土間にすゑた白木の机に陣取つてバクシは旗内から集つてくるさまざまな蒙古人たちの訴へをきいてゐるのだ。

相談に応じ、叱つたり、うなづいたり、判決をくだす。大小さまざまな草原の事件が一日中、諸方から馬で駆けつけてくる蒙古人たちによつてここへ持ちこまれる。

蒙古人に法律はない。今では事実上西ウジムチンの王に代る判決

者、命令者であるタラカンバクシの一顰一笑が蒙古人の法律であり、格言なのだ。

私は宿舎に寝ころびながらの雑談にも飽きて、ぶらぶら構内を散歩して、ふとその倉庫——いや、バクシの法廷をのぞいた時、三十二歳の大きな図体のバクシがむつとりと煙草を吸ひながら、三四人の蒙古人を集めて、その面前で二人の日本人を叱つてゐるのを見た。日本人のうしろにはきのふ会つた馬生福経理が三三人の手下をつれてきて立つてゐた。

「あんた方はさうして勝手な無法なことを漢人や蒙古人たちに仕向けて、それを私が取り締ると、又私のことをああだかうだと軍へ内報するのですからなあ。あなた方にはかなひませんよ。私は全くあはれな小役人ですからね。惨めな取るにも足りない若輩ですから、とてもとてもあんたの方がこはいですよ。恐れ入つてゐますよ。」

タラカンバクシは二人の日本人に向つてかなりしつこく同じことをくりかへして相手を窮させながら、汗のでるやうな赤い顔をして、なほいひついだ。

「何も僕のやうなけちな小僧がこんな奥地へきて、蒙古復興だの東亜の理想だのといつて夢中になつてゐるにはあたらないですよ。わづかな給料であたら青春の時期をこんなところに空費して臍を嚙まなくてもいいんですよ。いつだつてこんな小役人の位置なんか投げだしますよ。さつさと日本にかへつて、田舎で親の田地を耕して百姓にでもなるか、東京でサラリーマンになつて、喫茶店で女の子にいちやついてゐるか、どんなけちな暮らし方だつて、ここにあるよ

りはましですからね。明日にでもかへりますよ。ああ、かへりたい、かへりたい。その代り僕がかへる時には、「中略」あともかたもなくなるまであなたの方の仕事なんか土台からでんぐりがへしてかへつてやるからまあ覚悟してゐてもらひませう。僕は関東軍の一職員としては取るにも足りない虫けら同然ですが、一青年左近允正也にかへれば、銀座のまん中であんなくらゐな紳士の二人や三人張りたふすくらゐの乱暴な学生ですよ。癪癪を爆発させて僕はここで思ふ存分なことをして、かへる決心です。はつきり申しておきますよ。」

私はあんまり立ち聞きしてゐるのが悪い気がして、やうやくうす日のさしてきた庭の中をぶらぶら歩いた。そして宿舎にかへつてきて横になった。あとからかへつてきた左近允君は、蒙古刀だの帽子だの武装をほどこきながら、大きな体を敷物の上に投げだすやうに寝ころんで、

「ああ、やりきれん、やりきれん。先生きいてゐたでせう。僕は腹癒せをいひすぎたかも知れないが、蒙古人や漢人の前であれくらゐ日本人をやつつけておけば、得するのは僕なんです。蒙古人などはあれをみてどんなに僕を信頼するでせう。僕だつて三十二ですからね、政治的な駆引きだつてせざるをえませんよ。」

と、さつきのことにまだ興奮してゐる。きいてみると、あの二人の日本人は一人は大蒙公司、一人は蒙疆畜産の出張所員である。「中略」そしてこの二つの日本人商社は今関東軍の命令のもとにこの地で莫大な数の牛や馬を買ひ集めてゐる。その値段にいささか無理があつて収買ははかばかしくすすんでゐない。関東軍の特務機関員である

左近允君は側面からかれらの収買の手助けをしてやらなければならぬ。しかし左近允君の若い気持ちの中には、軍に名を籍りてかれらがどれくらゐ利益を食ふかを知つて、忿懣の情が沸きおこつてゐる。ともすれば左近允君の同情は、横暴な日本人からあはれな蒙古人や漢人を庇護しようとする傾きになる。をりからだんだん集つてくる牛馬が日本商人の手に引き渡される。それらの家畜の大群を管理してゐるのは傭はれた蒙古人である。時ならぬ時にこの附近へにはかに多数の牛や馬が集められたため飼料の不足がおこる。二人の日本人商人は困つたためではあらうが、それらの牛や馬をこの旗の蒙古人たちの特定の大切な牧地へ追ひこんだ。一方、又漢人商人たちが旗公署から許されてゐる牧草採集地に侵入して牧草を刈りつた。訴へが両方からたちまち左近允君のところへとんできた。その事件が数日前から突発してゐるのである。きのふ左近允君が私に道々日本商人の悪口をつき、蒙古人や漢人の立場を庇護してゐたのは、今おこつてゐるさういふ事件を背景にしたかれ氏の感情が多分に加はつてゐるのである。

西ウジムチン小学校

時刻はおそかつたけれども、この公署の向ひ側にみえる小学校を訪問することにした。さつきの公署の前で車をおりた時、遠くにみえる小学校の方では、二三十人の子供の姿が褐色の地平線を背景に体操をしてゐるのがみえた。そこが小学校なのだ。

私は又牛車に乗つてそこまで揺られて行つた。騎乗の二人は私の

着く前に小学校へ着いたので、あとからやつてくる「王様」を迎へるため、生徒たちは一人のこらず整列して待つてゐた。そして私が牛車からおりて、歩いて行つた時、けたたましい号令がかかつて、蒙古の少年たちが数列にゐならんで敬礼をした。もしかれらが木銃をでも持つてゐれば、捧げ銃でもしたことだらう。私はびつくりして立ちどまつた。ちよつと考へたが、やはり、日本流に帽子をぬいで一同の方へいねいにお辞儀をした。〔中略〕

私は成吉思汗の画像に帽子をぬいで敬礼した。そして副校長にきいた。

「講堂ではどんな話をなさいますか？」

「はい、世祖成吉思汗の歴史の中からところどころ例を引いて話をしたり自治邦の成立までの話をしたり、大東亜戦争の話をいたします。」〔中略〕

左近允君が外からはいつてきて、私にいった。

「さつきから生徒たちが、遠方からきたお客様に蒙古の歌を歌つてきかせるといつて、寒いのに整列して待つてゐます。すぐでてきてあげて下さい。」

私はいそいで外にでた。生徒たちははじめのとほり数列になつて整列してゐた。みんな国防色の制服を着てゲートルをつけてゐた。頭には防寒帽をかぶつてゐる者もあれば、むきだしの者もゐた。年齢は十歳くらゐから、十七八歳くらゐまでいろいろゐた。

私や左近允君笹目氏などの立つてゐる前で、生徒たちは一人の教師の指揮で、最初に「成吉思汗出征の歌」を歌つた。それはアジア

の遊牧民族に共通する一種の鈍重な牧歌の調子であつた。歌詞は少しもわからなかつたが、昔私が映画の「人生案内」で聞いた民謡や、シヤリアピンの「マセンカ」といふ民謡などどこか共通するその合唱の節まはしは、思ひがけなくもこの大草原の中に生きつづけてきたこれらの民族の歴史を私に味ははせた。

つづいて「蒙古自治邦の歌」だのいろいろな歌が歌はれた。

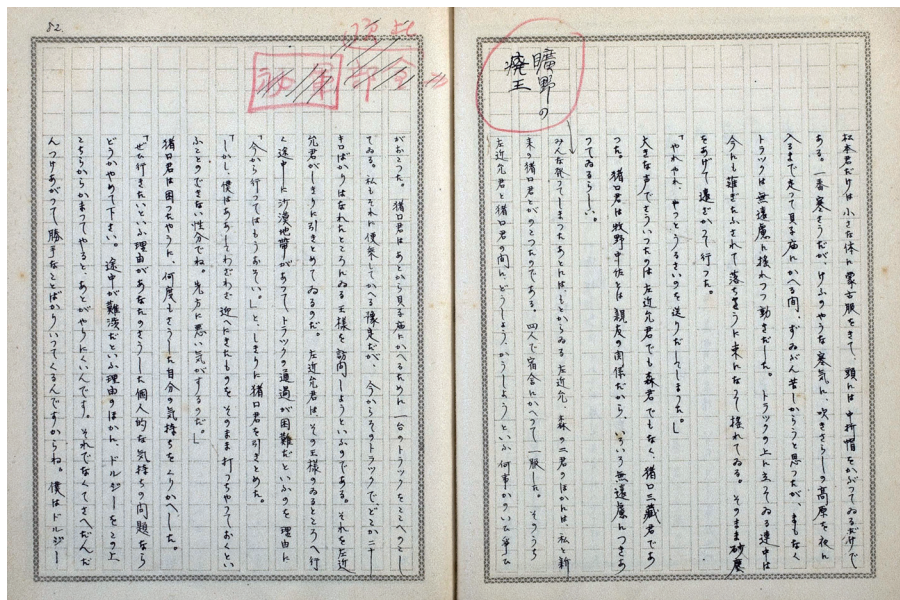
そして歌のあとでは分列体操もしてみせた。分列体操は上手だとはいへなかつた。しかし、ほとんどもう夜になつてきた日の落ちたのちの寒い草原で四五十人の子供たちが一所懸命にわれわれ三人の日本人にみせようと骨を折つてゐるその分列体操には、素朴な好感が感ぜられてならなかつた。私は立つてゐるのが寒くてやりきれなかつたが、我慢をしてじつとこれらの鈍重な体操ぶりをみてゐた。そして私たちは再び大勢の号令の敬礼に送られてここを出発した。

十月十九日 火曜日 (西ウヅムチン)

曠野の魔王

「ドルジ―つて一体だれのことです？」と、「*私は」猪口君にきいた。

「ドルジ―ですか、前の東ウヅムチンの王様なんですよ。それが仕方のない低能児で、数かぎりもない悪政を領内に施して、旗民を塗炭の苦しみに陥れてしまひ、自治邦ができてからも持てあましてゐた男なのです。関東軍でも東ウヅムチンは西ウよりもつと軍事



「曠野の魔王」のページ（10月19日）。赤字で「此項全部軍秘」とあり、見せ消しされている（『蒙古日記』第3冊）。本稿では「曠野の魔王」「プランパゴ」「一つの人生」が該当範囲。

的に對外蒙の基地として重要なところですから、治安を確保しなければならぬといふ建て前から、ドルジのやうな王様に任せてはおけないといふ意見が強く、結局僕らが手を打って徳王にひつくらせたのです。謀叛をおこしてゐるといふ嫌疑によつて……ほんたうは別段謀叛といふわけでもないでせうが、客観的にいへば謀叛と名づけられるくらゐ無茶苦茶なことをやつてゐたのですからね。覚醒する余地があればと思つてひつくくらせたのですが、根が低能児ですから何にもわかるわけがありません。少しでもわかる男ならかへつてその時殺されてしまつたかも知れませんが、よくみるとただのばかなので、どうしよう？ といふことになり、結局表面的には日本軍から徳王に頼んで助命を乞ふといふ形で釈放してもらつたのです。そして私が個人的に軍から身柄を預つた形になつて北京へつれて行つたのですがね……」

「猪口さん、そんな話をしてもいいんですか？」

左近允君が腹立たしさに叫んだ。猪口君は脇枕でにこにこしながら、

「いいさ。僕はのんきだから、貴司さんになら何だつて話してしまふよ。書いていけないことは貴司さんの方で取捨するだらう。（後略）」

やつとドルジといふ魔王の素性がわかつてきた。なほ私の質問に応じて猪口君や左近允君の語るところを綴りあはせてみると、ドルジは謀叛の嫌疑で捕へられた時王位を退き、その代り東ウヂムチンの王の位にはその子をすえた。子は七歳か八歳のかれの

長男で、今一人六歳か七歳の男の子がある。それはドルジのそばにゐる。ドルジの父はやはり頑迷な王であつた。しまひには狂ひ死してしまつた。気が狂つた時、狂暴性を發揮するので鎖か縄でつないで包の中にとちこめてあつた。その子のドルジだから低能なのは仕方がない。蒙古の貴族にはよく発狂するのがゐるが、それは精神病的素質といふよりも、脳梅毒が多い。ドルジの父王も多分それであらう。ドルジはまだ三十あまりの美丈夫で、ここから二十キロはなれた地点に、若い後妻と、その二男の男の子をつれて、何人かの家来や、何百頭かの羊、何十頭かの牛、馬、何十台かの牛車などを持つて暮してゐる。そのドルジは、猪口三蔵君が機関長とともにここへきたのを知つて、けさ早く幽閉地から駆けつけてきて、自分の大恩人を賓客として自分のあるところへ迎へたい、と申しでてゐるのである。自分で迎へにくるのは、貴族としての最上の礼儀であつた。

ブランバゴ——小熊秀雄の追憶

「さあ、でかけませう。」

私は猪口君と話しながら宿舎の門前にでた。トラックの上には赤い上衣を着たドルジ王と黄いろい汚れた着たきり雀のローライ（*ドルジの従者）とがならんで立つてゐた。左近允君も一張羅の蒙古服を着て不機嫌さうに車の上に乗つてゐた。

私と猪口君は二人ならんで助手台にかけた。車は走りだした。気がつくと、運転手は、貝子廟からくる時に私を乗せてきてくれた田

中君である。田中君はあれから貝子廟にかへり、今度はすぐ牧野中佐一行に加はつて奥地をまはつてゐるのだといふ。ここへくる時、ダウスノール附近でさんざん道に迷つて、湖畔で夜のあけるのを待つてゐたのだといふ。そのために牧野中佐の到着の時間がおくれたのだとわかつた。

「昔からダウスノールには古狐が棲んでゐると蒙古人がいふくらいであの辺で道に迷ふと、夜どほしぐるぐるのノールの周囲をまはり歩いて、本人は一定の方角へまっ直ぐにすすんでゐるつもりでゐるのです。そして夜があけるとやはりノールの附近からはなれることができないでゐる——さういふことが蒙古人の間にもたえずおこるので、古狐が棲んでゐるといふ伝説も生れたのでせう。一昨晩はすつかりダウスの狐にだまされて、一と晩湖のほとりに引きとめられたわけです。」

と、猪口君が笑つた。私などには昼間でも草原の方角はさつぱり見当がつかかなかつた。今も私の乗つてゐるトラックは、きのふ私が牛車で旗公署へ行つた時の道を走りだしたのはおぼえてゐるが、途中で右にそれて以来、どの方角へ走つてゐるのかさつぱりわからない。どちらをみてもなだらかな山の地平線ばかりである。

しかしだんだん車がすすむにつれて、けふは寒くて空が曇つてゐるせゐか、とりわけあたりが荒涼たる冬の感じになつてきた。灌木の枯枝が風に吹かれて枯草の上をころがるうち、ほかの枯枝や草の枯葉がひつかかつて丸い塊りになり、それがころろ次ぎから次ぎへ曠野を吹きころがつてゐるうちに次第に発達して中にはずゐぶん

大きな枯枝の毬となつてころがつてゐるものもある。草原ではこれをブランパゴと呼ぶ。——さういふことも猪口君が私に教へた。大小いくつものブランパゴが遠く近くころがつてゐるのは、風のある日の現象である。

私はふと、亡き詩人小熊秀雄⁽²²⁾を思ひだした。かれは「ブランパゴ中隊」といふ恐しく長たらしい詩をつくつたことがある。その詩は仲間の間では大へん有名になつたが、だれもしかし、ブランパゴが何であるかを知つてゐる者はなかつた。小熊自身も人にそれを説明したこともない。小熊が死んでからの十年もたつた今ごろ、私は蒙古草原をトラックで走りながら、はからずもそのブランパゴといふ言葉を又きいたのであつた。そしてブランパゴが何であるかを知つたのだ。怪びしい感じがした。

一つの人生

車はとまつた。トラックの上に乗つてゐたドルジとローライはすぐに車からとびおりた。何人もの家来たちが包の方からやつてきて出迎へた。それらのうしろにきらびやかな飾りを身につけた若い女が六七歳のかはい子供をつれて立つてゐた。それがドルジの妻であつた。向ふから近づいてきたのを見ると、背はあまり高くはないが、腰の張つたいかにも肉感的な、むしろ淫蕩な感じの女である。〔中略〕

「この女が又とんでもない悪女でしてね。二人の子供は先妻の産んだ子なんですが、ドルジの奴がこの女に惚れて、前の細君をず

ゐぶん虐待して叩きだしてしまつたのです。それにはドルジをそのかしたこの女の悪智慧がずゐぶんはたらいてゐるわけです。」猪口君が眼の前で私に話した。かれらには日本語がてんでわからないのだ。それをきいてゐた左近允君がなほつけ加へた。

「王府にゐる兄の子供は助かつてゐますが、弟のこのちびはこゝで継母に朝から晩まで苛められどほしなのです。いつか私が調べたら、このちびの尻つぺたは血痔だらけでした。みんなこの悪妻がつねつて傷をつけるのです。子供はすつかり怯えて、いぢけてしまつてゐます。」

かの女に手をひかれてならんでゐるかはい少年はみたところいぢけてゐるやうにはみえなかつた。継母が軽く後頭部をおさへると少年は私たちの方へべこりとお辞儀をした。

ドルジはわが家にかへつてくると、にはかに多弁になつて、何やらべちやくちやしやべりながら猪口左近允両君の肩口を取らんばかりにして自分の包へ案内した。

入口に立つて二人を包の中に入れると、かれは鼻声で何やらいひながら私の背中にも手をかけてつれこんだ。客人をつれてきたのが嬉しいのらしい。〔中略〕

「ドルジが貴司先生を一体何をする人だときいてゐるのです。」

と、左近允君が私にいつた。さういへばドルジは私の正体がわからないので、げげんに思つてゐるらしい。私は道々猪口君から、ドルジの一番こはいのは鼻を手術する医者だときいてゐたのを思ひだして、笑ひながら猪口君の方へ答へた。

「北京からきた鼻の医者だといつて下さい。一度診察してあげると伝えてもらいませう。」

猪口君は噴きだしさうな顔をしてドルジーの方へさういつた。私はその間に鞆をあげて、中の鉛筆箱をがちやがちやいはせた。ドルジーは逃げだしさうに膝頭で立ちあがつて、私の方へその片手をさしだして掌を立てた。片手では自分の鼻をおさへた。そして節のぬけたやうな大きな声で笑ひながら、しきりに何かいつた。

「器械をださないで下さい。鼻の病気はもう癒つたのです。私の鼻の病気のことは冗談です——といつてゐますよ。」

と左近允君が通訳した。ドルジーはをかしいほど騒がしいばかり声をだしてはしやいだ。そしてとうとう何やらいひながらでていつてしまった。細君も子供をそこにおいてでて行つた。

*ドルジー夫妻から客人たちに狐の皮が土産として贈られる。宴の準備が始まるが、暗くなると砂漠の通過が危険になるため帰路につくことになる。

われわれはドルジーの引きとめるのをふりきるやうにしてつひにトラツクに乗った。トラツクはドルジーの家来たちが羊の料理を盛つた洗面器を手に捧げてめいめい立つてならんでゐる前で埃を捲きあげながら動きだした。

二三町も走つてふりかへると、曠野のまん中に野ざらしとなつて建つてゐる、白い二つ三つの包の前にドルジー夫婦の姿がみえた。

ドルジーの着てゐる赤い上衣とその妻のつけてゐる頭飾りとが夕日に光つた。チョーメルゲン（*前出の少年・ドルジーの次男）もそこにゐるはずであつたが、それはみえなかつた。

更に五町も七町も走つてもう一度ふりかへると、曠野の遠くにドルジーの白い二つの包が暮れて行く空を背景に夕日の名残りを反射してゐた。まもなくこの広表たる草原は夜になるであらう。そしてかれらはあの小さな包の中に、あんな小さな小さな子供も眠る。大草原の中の、何といふかすかな生き物の存在であらう。……

私のトラツクは走りに走つてかへりの道をいそいだ。もう日の落ちたあとの野の道はたそがれの色が渦を捲いてゐた。山七面鳥の姿もあちこちにみえたが、鉄砲を撃つてそれを威かしてゐる暇はなかつた。まつすぐに車はプランパゴを追つて走つた。

プランパゴ、プランパゴ——うす闇の野の面をプランパゴの吹きとんで行く草原もやがては冬に凍てつかう。ふりかへるともう包の姿はみえなかつた。いつのまにか私は再び無人の世界にかへつてゐた。そしてかへつてドルジーの包がみえてゐた時よりも一そうはつきりとかれらの顔や声がまざまざと臉の中によみがへつて消え、消えては又よみがへつてきた。私は結局一つの人生をのぞきみたのだ。

*十月二十一日、貴司は猪口とともに左近允が滞在、支配する西ウジムチンを発ち、午後六時に貝子廟に帰着する。「西ウのやうなところからでくると、貝子廟は草原の大都会」とある。

*二十六日まで貝子廟に滞在、中学校見学、新設された「貝子廟手

芸養成所」開所式に立ち会う。また壮大な保健所が建設中で、かつて日本で救癩事業に挺身し、今はここ内蒙で僻地医療に身を投じている青山守次医師²³を取材し、内蒙古のあからさまな保健・医療状況を聞いている。牧野特務機関長は貝子廟のラマ寺の面従腹背ぶりを非常に気にしており「放火して慌てさせるか」などという。

*十月二十六日夕刻、飛行機で張家口に帰着。岡部参事官宅に宿泊、風退治などしてもらい三十一日まで滞在し、『蒙疆文学』同人、「蒙疆芸懇話会」の人々と懇談、張家口経済研究所を取材しいろいろな資料をもらう。満洲貴族憲容の邸に招待される。岡部理と古本屋をめぐり本の話に熱中する。

*十月三十一日、張家口出発。列車で大同經由、山西省太原へ。

十一月一日、山西省顧問で隠然たる実力者甲斐政治²⁴と面会。

*十一月三日、北京の福田千之宅に帰着。野田律太の息子浩一²⁵、村上知行、また新民学院教授数納兵治の人脈で、吳燕紹などユニークな人々と会う。中には盧溝橋事件のとき宗哲元軍の下士官で流暢な日本語で停戦協定を実質的にまとめたという曾廣准という人物もいる。

*十一月十四日〜十九日、福田千之の誘いで、奉天、ハルビンを旅行。

十一月二十日 土曜日（新京）

山田清三郎と再会

未明新京着。

一昨日新京にきてゐるはずの田邊氏に頼んでおいた駅のすぐそばのアラトホテルへ行つて、部屋をきくと寝てゐるのをおこされた番頭のやうな日本人の青年は仏頂面をして鍵をだしてくれる。

狭い一室にはいつて食事の時間を待つ。その間水道の蛇口をひねつても、手を洗ふ水さへ出ない。新京は午前中は水道の配水をとめてゐるとのことである。部屋にはスチームも通っていない。外套を着たまま急に日本的になつてきたこの不自由感に堪へながら、やつと午前九時ごろになる。

*ホテルで朝食を済ませ、新京駅で北京に帰る福田と別れる。

アララトホテルにかへつて、満洲新聞社にゐるはずの山田清三郎²⁶を呼びだすと、私がこの地へきてゐるのにおどろいた山田君は、すぐに訪ねるからとのこと。山田君の電話が切れて三十分もすると、本人よりも先きに新聞社の写真班と記者がやつてきた。そして私の写真を撮り談話をきき取つて、何だかだと応答してゐるところへ山田君がきた。

記者と写真班がかへつたあと、山田君と二人だけになると、少し大陸ぼけがしてゐるみたいな山田君が、

「君はM君とそんなに古い友だちなのですか？」

と、きく。私はしばらく忘れてゐたM君の名をここできいて、一種の錯覚に囚はれながら、

「M君がここへきてゐるのですか？」

「いや、去年きて君の話がでたのですが、その時M君は貴司さんとはもう十何年来懇意にしているといてあるし、自分が案内して蒙古へつれて行くのだといつてゐましたが……」

私は苦笑した。万事さういふ風に対人関係で嘘をつくのが目立つてゐるM君の嘘のつき方に気がついてゐたので、ありていの話をした上、

「君のことをM君は、去年自分が北京にゐる時、林房雄を訪ねてきた山本君（*山田（清三郎）の誤記か）が向ふから会ひにきたのでいろいろ世話をしてやつた。山田清三郎君は今まで知らない人だが、どういふ人なのか？——と、去年の秋だつたか今年の春だつたか僕にきいてゐたことがあるが、君がM君と知りあひになつたのはその時か？」

と、きくと、山田君はおどろいて、

「すつかり君と僕をあべこべにしてしまつたな。僕の方がM君とは十数年来知つてゐるんだ。さうか、あははは。」

と、笑ひだす。

「十数年前にどこでどういふ知りあひなのだ？」

と、きくと、やつとM君の真相が判明した。

左翼の事件で山田君が千葉の刑務所にはいつてゐたのはなるほど今から十数年前であつた。その刑務所の中で愛嬌者でとほつてゐたMは、横山大観の書画偽造常習犯人として前科二犯、四年の刑期を千葉刑務所内に暮してゐた。さういふ場所での知りあひなのだ。

「へえー、おどろいたね。どうもすつかりかつがれてゐたわけか！」

それにしても念が入つてゐる——と、私は蒙古以来M君にしてやられてゐたのは、やつぱり私の方だと悟らざるをえなくなつて、にがにがしい思ひにとざされてしまつた。蒙古へ発つ前に山田君から一言と言さういふことをきく機会があれば……さういふ機会があれば私は蒙古へこなかつたかも知れない。すると、けふ別れた福田氏のやうな「老朋友」をえられなかつたかも知れない。まさしく福田氏のところへ私を案内したのはM君なのだ。瓢箪から駒の譬へのとほりだ。何といふことだらう！（中略）

山田君のかへつたあと、朝日新聞新京総局に電話をして、総局長の楠見氏と電話で話す。

睡眠不足を取りかへすために夜八時に寝てしまふ。

*十一月二十一日には朝日新聞社の車で市内見物をしたり、満洲文芸家協会の招宴に応ずる。「全く日本人によつて建てられた、二十世紀の美を持つたほんたうに新しい都市」、「新京の町の美くしさを眼にしみるやうに感じた」と綴っている。

*十一月二十二日、特急「光」で新京を発つ。

十一月二十四日 水曜日（朝鮮海峡）

知識層移民団を——朝日新聞満洲総局長との船中談

六時に起きる。

七時半（*午前）釜山着。ここで連絡船に乗るのに一時間あまり

行列をした。

私が蒙古を歩いてゐる間に、連絡船が一隻アメリカの潜水艦に撃沈されて何百人の死傷者をだして以来夜の航海をやめた。三隻一しよに出帆して、途中を飛行機や駆逐艦などが警戒することになつてゐる。そのために旅客は制限されてをり、乗船日と乗る船とがあらかじめ切符の裏に指定されてある。

あつちへ、こつちへ、いい加減たづねまはつて、やつと九時すぎに船に乗る。景福丸といふ船だ。船の名は口外してはならないさうだ。〔中略〕

救命具を体の前後にくつつけた不自由な恰好で、「やあ。」と私に挨拶した人があつた。みると、この間新京の駅で初対面の朝日新聞の楠見氏であつた。〔中略〕

昼の食事に食堂へ行つてみると、みんな救命具をつけて首もまはらない妙な恰好で、苦しうに食事をしてゐる。おまけに膳につてゐる飯は玄米のかちかちで、清し汁のお椀の中には魚の尻尾が少しばかりはいつてゐるきりだ。それで一円の食費を取るのも、日本的とでもいふのかしら。

船はよく晴れた朝鮮海峡を電光形に航海してゐる。非常な速力だが、方向をかへるたびにかなり船自身が傾く。フロートをつけた水上機が船の上を旋回してをり、遠くに駆潜艇か駆逐艦か、それとまただの発動機船か、二艘も三艘もの黒い船影が動いてゐる。いづれにしてもまづ昼間アメリカの潜水艦がこゝへあらはれるやうでは、日本ももうおしまひにちがひない。

私は別にアメリカの潜水艦を心配しなかつたし、サロンで何時間も楠見氏と対談した。

この時の対談のうち、私が楠見氏に約束をした一つの問題があつた。それは新京附近あるひは錦州附近に満洲国における義勇移民団の模範村をつくりたいといふ計画である。

楠見氏は最近に満洲国政府から求められて国内各地にすでに十数万にのぼる義勇移民団の実体を視察した。その結果痛感されたことは、これらの移民団が大東亜建設の理念の実現として、自己の任務の遂行にあたつてゐるといふ実質が、事実上失はれてしまつてゐるのが非常に多いことであつた。

これをそのまま放置すると、乃至はこのままで押して行くと、開拓移民事業の質的低下乃至崩壊をきたす恐れのある重大問題である。そしてこの欠陥はどこからあらはれたか？ それはこれら多くの開拓移民に大東亜建設の理念を理解するだけの知識や教養が不足してゐるのに主因する。で、ここに知識程度の相当に高い開拓移民村を建設して、理念と実践を一致させ、満洲国における開拓移民団の水準を示す模範村をつくりたい。

それには日本内地の知識階級層から移民団をつくりあげて、満洲国に移駐させなければならない。その知識階級移民団、模範開拓移民村は、主都新京の附近に建設したい。〔中略〕

現在満洲国では日本内地の文化人の来満を切望してゐるが、大東亜戦下食料供給地としての満洲は、今や手一ぱいで、小説を書き、絵を書く人を首都において一年中遊ばしておく食料がない。食料は

あつても住宅がない。そのために文化的はたらき手の来満を希望しながら、それが実現不可能の状態にある。この隘路を打開するのが模範開拓移民村の建設、知識階級移民団の実現である。――以上のうちあとの半分は、私自身の考へである。

楠見氏は朝日新聞の退職者中から、この知識階級移民団を一つ組つくる目的をも兼ねて、今度内地へかへるのだ、といふことであつた。夜になつて、船はやつと下関に入港。さすがの私も無事下関の港の灯がみえてきた時には、ほつとする。七十日あまりみなかつた故国を今再びみいだして何かの喜びを感じるといふことはなかつた。残念ながらそれはなかつたのだ。一步上陸してしまへば、あとはもう出発前の知りつくしてゐる艱難の多い生活の軌道が私を待ちかまへてゐるのだ。

汽船は吼えるやうな汽笛を鳴らした。

私の旅行は終つた。

(丁)

補注

(1) M…画家で厚和特務機関囑託を自称する人物。貴司を内蒙古旅行に誘い、前半同行して先達をつとめた。しかし、行く先々で身許を不審がられ金銭的にもルーズだったため、ついに貴司は同行を断り、西ウジムチン以降は一人旅となつた。後にその予想外の身許が明らかになるが、プライバシーを考慮してイニシャル表記とした。

(2) 松下衡次郎…東京の蒙古代表部で、北京に行つたら訪ねよと紹介さ

れた人物。日本軍用の製氷工場を経営する事業家だが懇懇な教養人で、中南海に住む特権をもつ「老北京人」。史蹟などを案内される。

(3) 福田千之…北京へ来たその日に知己となり、以後戦後に至るまで「老朋友」といえる親交を重ねた人物。若い頃から事業家を目指してドイツ、ロシア、ハルビンなどを流浪し、この時点では北京とハルビンのキャバレー雅叙園のオーナー。戦後日本に引きあげ、当初数カ月貴司家に寄寓、のち銀座にレストラン「トロイカ」を開業。一九五四年死去。

(4) 黄子明…戦前の親日映画演劇人。昭和天皇即位奉賛映画「民族の叫び」の原作者。

(5) 坂井徳三…プロレタリア詩人、中国文学翻訳家、著書に『坂井徳三詩集』(一九七三年)、翻訳に丁玲『太陽は桑乾河を照らす』(一九五六年)、『中国解放詩集』(一九五三年)などがある。一九〇一―一九七三年。

(6) 雲崗石仏…中国山西省大同近郊にある巨大な石窟寺院遺跡。竜門、敦煌とともに中国三大石窟といわれる。

(7) 蒙古自治邦…一九三〇年代から内蒙古自治運動を追求してきた運動のリーダー徳王(ドムチョクドロンブ)が、内蒙古を支配した関東軍との政治的妥協によつて成立させた内蒙古政府。一九三七年厚和(フホト)で「蒙古聯盟自治政府」として発足し、一九三九年九月張家口に移り「蒙古聯合自治政府」⇨蒙古自治邦となつた。一九四五年日本の敗戦にともない瓦解。

(8) 龍烟鉄鉱…一九二〇年頃、北京原人発見で著名なスエーデンの地質学者アンダーソンによつて発見された大鉄鉱山。良質の赤鉄鉱を産する。一九三七年七月の日中開戦により、日本軍(関東軍)が一方的に軍事制圧、鉄山を接収した。以来敗戦に至るまで、日本の重要な鉄資源鉱山として経営されてきた。

(9) 李守信將軍…モンゴル族の軍人。一九三六年徳王の運動に参加、

参謀部長、一九三七年蒙古軍総司令、一九四一年蒙古自治邦副主席、一九四九年国民政府敗北後モンゴルに逃亡、一九五〇年収監、一九六四年特赦、一九七〇年フフホトで死去。

- (10) 岡部理…興蒙委員会専門顧問。九大出身、元北満州の官吏。張家口で知りあい、以来非常に気が合い、世話にもなった。戦後日本に帰国し、その後も貴司と長く親交があった。

- (11) 須田正継…イスラム学のオースリテイ、当時は内蒙古・厚和（現綏遠Ⅱフフホト）の日本領事館高官。貴司は内蒙古旅行で知己となり、戦後、帰国した同氏と長く親交があった。多くの人を紹介され仕事の間でも関わりが深く、岡部とならぶ貴司の蒙古人脈の中心人物だった。イスラム学の専門家で学者でもあり、石井部隊と関係があったとも貴司日記本文に記載されている。

- (12) 蔣輝若…一九二〇年代内蒙の軍幹部だった中国人回教徒、貴司が会った時点では日本軍に協力し蒙古自治邦回教委員会委員長。品のあり聡明な印象の人物で「保商隊」という私兵を蓄えている、と記載されている。日本敗戦後軍事裁判にかけられ、一九四五年十月自殺。

- (13) アパカ特務機関…昭和八年に、蒙古浪人たる盛嶋角房が軍囑託として西ウジムチン王府に特務機関を設置し、昭和九年貝子廟に進出したが衰退、昭和十五年に正式に関東軍のアパカ特務機関として再発足した。満州蒙古（興安四省）以西の内蒙古北東部一帯を管轄する、百人近いスタッフを擁する大組織である。（※上記は主に内蒙古アカカ会・岡村秀太郎共編『特務機関』（国書刊行会 一九九〇年五月）三二～三九頁による）この特務機関がシリントに所在するのになぜアパカ機関とよばれているのかは不詳。『蒙古日記』にはこの西ウジムチンの盛嶋機関設置についての裏面の動きと盛嶋への批判などが笹目雄恒の述懐として記録されている。

- (14) 貝子廟…貝子廟そのものは内蒙古四大寺院の一つの呼称であり、貴

司が訪れた時点でも千人近いラマ僧がいると書かれている。その所在地は内蒙古の中央部を占める広大なシリントール盟の中心都市シリントであるが、貝子廟が有名なため、シリントの代名詞として用いられることもある。この『蒙古日記』でもシリントという都市名はほとんど使われず、もっぱら貝子廟が寺院ではなく、この町の呼称として使われている。シリントの西側の一帯がアパカ旗、東側の一帯が西ウジムチン旗（盟が日本でいえば府県、旗が郡というイメージ）であり、西約百キロにアパカの中心集落、東百五十キロに西ウジムチンの王府がある。

- (15) 機関長牧野中佐…陸軍騎兵中佐。昭和十五年設置当初からのアパカ（貝子廟）特務機関長。明敏な人物で関東軍の満蒙政策のリーダーの一人だったと考えられる。貴司の取材にも好意的に対応し暗黙に機密情報を開示したりしている。昭和十九年六月一面披（イーマンボ・ハルビン東南方百キロの町）機関長に転じた。（※前掲『特務機関』による）戦後シベリアに抑留、一九四六年十月十六日ソ連沿海州第十三收容所で死亡。ウラジオストク市民墓地に埋葬された。（※村山常雄編著「シベリア抑留死亡者名簿」（インターネット版 <http://yokuryu.hnucc/index.html> 2013/1/31 閲覧）による）

- (16) 猪口三蔵…ハイラル（現ホロンバイル市）で牧童をしていた。十七歳の時誤って越境しソ連チタ監獄に三年間在監、その後ハイラルでホテル経営とともに日本軍特務機関員として活動。ノモンハン事件や満蒙国境策定の日ソ交渉に関与、戦後帰国し間もなく死没。本文では笹目など多くの蒙古運動家が独断専行型であったのにたいし、猪口は軍や外務省の組織に従って行動するタイプで、また自己の功績を吹聴しない「物事に執着のない人間」と書かれている。

- (17) 左近允正也…早稲田出身で当時三十二歳の青年。牧野特務機関の囑託、盟公署の官吏という資格で西ウジムチン旗に駐在。この僻遠の

地で日本軍権力を代表する唯一の日本人として、西ウジムチン行政を専断するという不思議な地位にあった。巨漢で、現地の人々からは「タラカン・バクシ（巨大漢先生）」と畏怖されていた。（＊苗字の読みは一般にサコンジ、サコンジョウがありどちらで呼ばれていたかは不明）

- この左近允青年のその後の運命は、前掲『特務機関』の記載を調べると、昭和二十年八月九日、ソビエト軍侵攻にともないアパカ機関は西ウジムチンなどの分派機関を含めて撤収後退を開始し、渤海湾に近い錦県（錦州市）で八月二十二日ソビエト軍に降伏、武装解除を受け事実上消滅した。ここで大部分のメンバーが釈放され帰国の道をたどるが、木村機関長以下二十名は長春に移送された。その移送者の中に左近允の名も含まれており、巻末名簿には「戦死」とある。
- (18) 森憲一…第六高校から京大法字部に進学。在学中に猶興学会に入り血盟団運動に参加する。関西遊説中の若槻礼次郎を追うも暗殺に失敗した。判決は懲役四年。一九三七年、釈放。ソ連参戦後、行方不明（戦死）か。

- (19) 笹目雄恒…中央大学中退、興蒙のロマンを抱き、大正十五年東京駒場に蒙古留学生のための戴天義塾設立、昭和三年北京に滿蒙義塾設立、昭和八年徳王私設顧問。『蒙古日記』の中に「内蒙自治政府の大事を決定した徳王主催の百霊廟会議の實質的仕掛け人だった」という趣旨の述懐が記録されている。ラマ教学博士、戦後ソ連に長期間抑留、昭和三十一年帰国。奥多摩大岳山に道院をたて籠る。『神仙の寵児』という著書があり神仙と交流があったと語る。なお、戦後の著作では名前は「恒雄」「秀和」などと表示されている。一九〇二～一九九七年。

- (20) 活仏…チベット仏教独特の存在で、優れた修行者（ラマ僧）の生まれ変わりで、生まれながらに聖性をもついわば「生き仏」とされる存在

在。その一人であるダライラマなどはその一挙手一投足が世界政治に影響を与えるほどの大物だが、実際には蒙古草原にたくさんの形骸化した活仏がいたと考えられる。活仏の転生は先代活仏の、あいまいな遺言に基づいて、一帯の幼小児から探索決定されるので、それまで僻遠の集落の演垂れ小僧だった小児が突然寺につれてこられ特訓をうけて「仏」となることが多い。西ウジムチンの活仏は七歳の小児であった。（この寺院は十月十四日の日記にある「ウルデイトノム寺」と推定される）

- (21) 王・王様…伝統的に羊、土地、権力を保持する、一般的に言えば領主である。清国によってその権威と地位をオースライズされた特権階級だったので、中国風に「王」とよばれ、多人数存在する。昭和十八年の時点でも、この古い特権階級は隠然として存在しており、蒙地経済の近代化の問題点になっている様子が、日記にもしばしば登場する。

- (22) 小熊秀雄…北海道小樽出身の詩人。旭川新聞記者などを経て一九二八年上京。一九三二年プロレタリア作家同盟に加入、一九三四年『詩精神』同人、一九三五年、詩集「飛ぶ櫓」刊行。一九四〇年には漫画「火星探検」を刊行、SFマンガの先駆的作品として最近注目されている。「ブランバゴ中隊」は詩集「飛ぶ櫓」に収載されている。一九〇一～一九四〇年。

- (23) 青山守次医師…貝子廟で蒙古人医療に挺身し「ボルハン・エムチ」（仏の医師）と呼ばれている日本人医師。貴司は詳細な聞き取りを行っている。住民の梅毒感染率など「極秘」データを開示され、また、さまざまな苦労話も聴取し、当時の蒙古草原での医療の実体があからさまに記録されている。青山医師は内地では救療事業を行っており「小島の春」作者の小川正子の同僚と記載されている。

- (24) 甲斐政治…戦時中は山西省顧問など、大陸で活動。若い頃は詩作も

あり、戦後右派社会党などから宮崎選出衆議院議員に出ている。

- (25) 野田律太…一九二五年ころ共產党系の日本労働組合評議会委員長、貴司と親交有り「野田からの題材提供で書いた作品は、このころ無数にある」と貴司は述べている。戦時下に転向し保護司となり、多くの転向者の面倒を見た。一九九一〜一九四八年。

- (26) 村上知行…中国文学翻訳家、随筆家。福岡出身、九州日報記者、新派座付き作者などをへて一九三〇年から北京の路地裏に住む。讀賣特派員となるが日中戦争勃発を機に退社、戦争報道と一線を画し市井に徹する。戦前には「支那及び支那人」「北京歳時記」「北京十年」など著書多数。一九四六年帰国し「聊齋志異」「水滸伝」「金瓶梅」など中国古典文学の紹介に努めた。一九七六年自死。

- (27) 新民学院教授数納兵治…新民学院は北京を軍事占領していた日本軍が昭和十三年に、官吏養成の最高学府という位置づけで、滝川政次郎に委嘱して北京に作らせた高等教育機関。関連研究論文（*島善高「国立新民学院初探」『早稲田人文自然科学研究』52号、一九九七年十月）では数納の名前は見いだせないが、在職したものと推定される。数納に関してはむしろ戦後の再会が特筆に値する。敗戦後帰国した数納は、出版社富山房の社員となり、突然貴司の下に現れ、貴司の精選された作品集を出す豪語し、真に受けた貴司は収録作品を選び、組版やポイント指定まで入れた完全原稿を用意する。しかし、結局支離滅裂な話で出版は行われなかった。

- (28) 山田清三郎…作家、評論家。『種蒔く人』同人、プロレタリア文学者として活動、『戦旗』編集責任者、プロレタリア作家同盟活動家。一九三四〜一九三八年下獄。『囚敵』『日本評論』一九三八年十月号で第八回芥川賞の一次候補。転向し一九三九年「満州新聞」記者となり新京に移住。戦後、五年のソ連抑留後帰国。新日本文学会会員。一九九六〜一九八七年。